

日本の宗教状況とキリスト教 - 過去・現在・未来 -

芦名定道

<内容>

1. はじめに
2. キリスト教の基本構造
3. 過去
4. 現在 - 現代日本の宗教状況 -
5. 未来 - 展望 -

<文献>

- 佐藤敏夫 『植村正久』新教出版社 1999年
大木英夫 『組織神学序説』教文館 2003年
田川建三 『キリスト教思想への招待』勁草書房 2003年
森本あんり 『アジア神学講義』創文社 2004年
芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社 1995年
「東アジアの宗教状況とキリスト教 - 家族という視点から - 」(『アジア・キリスト教・多元性』創刊号 現代キリスト教思想研究会 2003年
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/asia/journals/01ashina.pdf>)
「死者儀礼から見た宗教的多元性 - 日本と韓国におけるキリスト教の比較より - 」(金文吉との共著、21世紀 COE プログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書 2004年
http://www/hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/report/2-pdf/3_tetsugaku2/3_02.pdf)

<アウトライン>

1. はじめに

1. 自己紹介と問題意識

2. キリスト教の基本構造

2. キリスト教神学あるいはキリスト教の現在を論じる枠組みとして
3. 「状況とメッセージ」構造
ティリッヒの『組織神学』第一巻：状況とメッセージ、問いと答え
4. 状況との関係では、状況適応性が、メッセージとの関係では、自己同一性が問われる。キリスト教の危機は、この二つの極において顕わになる(モルトマン)。
5. 「過去 - 現在 - 未来」プロセス
現在のキリスト教の直面する問題状況を理解するには、過去 - 現在 - 未来というプロセスで考える必要がある
6. モルトマン 『イエス・キリストの道 メシア的次元におけるキリスト論』新教出版社

「人が一方的に作用[効果]にのみ目を向けるならば、そのあらゆるキリスト論的発言の治療的現実性にもかかわらず、ふたたび同一性の危機[キリスト教でなくなる危険]におちいる場合がある。私たちは、キリスト論の同一性と適応性を交互に関連させながら、それによって二重の問いの前に立つのである。すなわち、イエスは真にキリストであるか？ イエス・キリストは今日私たちにとって、いったい誰であるのか？」(86頁)

3 . 過去

- 7 . 明治期以降のキリスト教を取り巻く日本の状況：反キリスト教的社会、近代国家形成（近代的な民族主義）と天皇制、近代的システムとキリスト教
- 8 . メッセージ：
 - ・ 教派主義とその克服の努力公会主義（佐藤敏夫）
 - ・ 日本的キリスト教の試み
 - ステップ1：日本のキリスト教会の欧米のキリスト教会からの自立
 - ステップ2：日本の伝統的な宗教文化への積極的な適応
- 9 . 転換点としての大正デモクラシー（内村鑑三が非戦論を唱えた時期）
- 10 . 第二次世界大戦・戦後の評価（大木英夫）
 - 日本国憲法における政教分離原則の導入
 - 現実の基本的レベルにおける戦前的な状況の継続

4 . 現在 - 現代日本の宗教状況 -

- 11 . 現代日本の宗教状況 新宗教の動きの中に、宗教状況はもっとも鮮明に反映している。
 - 新宗教の動向から社会変動を見る 諸宗教の共有する課題
 - 「戦後」の崩壊：家族の崩壊、保守化
 - 阪神大震災とオウム事件
- 12 . メッセージ：アジアの神学の試み（森本あんり）
 - 死者儀礼に顕著にあらわれた問題 = 宗教的寛容の問題
 - 家族と個人の信仰、教会としてのスタンス、日本的なものへの関わり方

5 . 未来 - 展望 -

- 13 . 現在の状況から：人格・人権思想の一定の定着と保守化の進行
 - 現代日本の保守化に対して教会はいかなるスタンスをとるのか
- 14 . メッセージから、キリスト教は何を語るのか（視点として）
 - 教会制度のための教会ではなく、神と神の被造世界のための教会(ボンヘッファー)
- 15 . 家族の変貌・高齢化社会に対するメッセージとして
 - 家族の再構築に対して、教会はいかなるメッセージ・ヴィジョンを語るのか
 - キリスト教の特徴（内村鑑三）
 - 人々をキリスト教への引きつけたもの（田川建三）
- 16 . 家族のメタファー化 「神の家族」
 - 否定 意味の転換 新たな肯定・拡張 実践

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにはふさわしくない。」(マタイ 10:34-37)

「さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です』。それからこの弟子に言われた、『ごらんなさい。これはあなたの母です』。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。」(ヨハネ 19:25-27)

「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。」(マルコ 3:34-35)

17. クロッサン 『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社 1998年
聖書学の新しい動向
18. 日本社会において家族のメタファー化をいかに遂行するのか
家族の形態の多様化
 1. 崩壊(過去の)
 2. 可能性(未来の)

<文献からの引用>

1. 佐藤敏夫 『植村正久』新教出版社

第一章 植村は長老主義者であったか

一 ロンドン宣教会と東洋伝道の方針

「植村と教派的伝統について語るためには一八世紀末のロンドン宣教会 (London Missionary Society) の創立総会にさかのぼる必要がある。」、石原謙の見解

「プロテスタントの東洋伝道の基本方針」(11)

「広義の信仰復興運動が世界宣教運動を推進した功績」「超教派主義」(12)

「プロテスタントの宣教師たちが東洋各地において臨時宣教師総会 (General Conference of Missionaries) を開催し、相互の交わりに意を用いていた」(13)

二 福音同盟会と日本の教会

「長老主義が押しつけられなかったこと」(13)

「あまり教派にこだわらず伝道して行きたいという方」

「福音同盟会の発足」「できるだけ広範囲の教派に共通項を見出し、それによって一致、協同しようとする。まさしくエキュメニズムの前段階である」(14)

「一応教派の宣教師でありながら、教派を超えようとする教会史的潮流に身をおいていた」(15)

三 日本基督教会とは

「日本のプロテスタント教会は、最初は超教派的な「公会」として出発」(15)

「明治五年横浜公会が成立」

超教派主義 / 福音同盟会の「教理的基礎」を採用 / 教会制度としては長老制度

「旧日本基督教会とほぼ似ており、また植村正久ともほぼ似ている」(16)

「日本基督教団の成立」を「軍部の圧力のからだけ説明し去るのは余りに単純である」(16-17)

「日本基督一致教会」

「長老主義系諸ミッションの合同教会」「公会主義と教会主義とが、十分な調整も総合的努力もなしに安易に合同している」(17)

2. 大木英夫 『組織神学序説 プロレゴメナとしての聖書論』教文館 2003年

「なぜキリスト教か」、これが、日本において、そして二十一世紀の世界において、神学が取り組まねばならない問いであります。」(21)

「この明治の神学なき近代化政策」(30)

「今日の日本の状況は、近代化政策の失敗によるものであります。」(32)

「和魂洋才」、森鷗外『かのように』(1911)

「啓蒙主義の影響のもとで、神学が取り組んできたリアリティがいまになっている知的状況」(39)、「文化プロテスタンティズムが神学の方法として取り入れた「ヴィッセンシャフト」は学問的な確かさの追求でありましたが、それはかえって宗教的リアリティの確かさを喪失させる結果となったのであります。」(41)、「その弱点は、神の「リアリティ」

の問題であります。」(41)

「日本近代の虚妄性」(42)

「日本における神学的実存」(49)

「それは日本における神学的実存というならば、明らかに「日本」を場としております。それは、たしかに宗教多元的状况の中であります。しかし、その中で更に特定して日本における「教会」を場とするのです。」「神学的実存の確立は、宗教多元的状况における教会をどう踏まえるのかという、現実的かつ神学的努力を必要とするのであります。」(50)

「欧米の神学者が出発するところからわれわれは出発することはできない、だからスタートラインをもっと手前に下げねばならないのであります。」(97)

「バルトの「啓示」論よりも手前に「そこに聖書がある」という事実への驚きから出発しようと思うのであります。」「そのことへの驚きが、日本の知性を神学へと向かわせることになるのであります。」(99)

「アングロ・アメリカ的近代性とドイツ的近代性というこの二つの近代性の由来となる〈分岐点〉を求めて歴史を遡れば、三十年戦争とピューリタン革命との違いに至るのであります。」(125)

「その区別なしには、日本の神学一般、とくに組織神学を、無反省にドイツの神学史とみずからを結びつけようとすることになり、神学を神学として確立することなく、それを思想史研究という一種の歴史研究(ヒストリエ)に変質させることになるからであります。」(129)

「日本においては、古代教会の弁証家たちのような聖書とギリシャ哲学との総合ということは課題になりません。われわれは、近代社会が置かれている状況から出発して別様に考えるのであります。聖書がイエス・キリスト証言という一点に収斂することは、正典的場における垂直次元の成立を意味します。その上方に、内在的三位一体論が現出します。」

「敗戦後、状況そのものが(神学とは関係なしに)大きく変化しました。」「日本国憲法」「国家成立の基礎理論の違い」「契約原理」の導入、「教会と国家の分離の原理の導入」「国教会制度」の廃止、「宗教団体の「自由教会化」」「国家の世俗化」「契約化」とか「自由化」という概念を用いて言い表されるような社会変動プロセス」(477)

「神学は日本の「自由社会化」という社会形成に参与し、「イエス・キリストの永遠的妥当性」「この特殊歴史的妥当性は、普遍的妥当性を示す一つのケースとなるのであります。」(478)

「われわれの日本国憲法の基本理念は、その歴史の連続する同一の地盤の上に置かれているのであります。」(510)

「イエリネックが言うように、その理念が近代憲法の中に制度化されるということなしには、現実的意味をもつことにならない」(515)

「日本国憲法は日本の古いパトリアーカリズムを克服して、家族の原理は一夫一婦制による契約的結合になるのであります。」「<自然>から<自由>への移行つまり「自由化」という変動過程があるということであります。」「古い大家族主義から新しい家族主義へと移行する」「質的な変化」(516)

「今日の家族の崩壊は、憲法によって規定された原理による新しい家族形成ができていないからなのであります。」(517)

3. 森本あんり 『アジア神学講義 グローバル化するコンテクストの神学』創文社

第1章 C.S. ソン 「応報の神」へのアジア的批判

「祖先崇拜の問題」

「祖先崇拜は、日本でも宣教の場面でしばしば焦点の一つとされているが、日本に限らず汎アジア的に見られる慣習である。」(74)

「先祖の位牌を「偶像」と捉えるか否かの議論もあろうが、それに先だってまず確認すべきは、「偶像」が現実世界の深みを探し求める人間の強力な宗教的シンボルだという点である。」「永遠の生命への深い霊的な切望が隠されている」(75)

「ソンがここで注意を喚起するのは、「死者の魂を宥める」ことと「死者を神的な存在として礼拝する」こととの相違である。両者は区別されるべきである。」(76)

4. 田川建三 『キリスト教思想への招待』勁草書房

「使徒行伝の「理想」から、四世紀のキリスト教会の実態まで、一つの非常に大きな飛躍がある。自分たちの少人数の仲間内の助け合いの倫理から、世の中すべての人々へと目を向けていく助け合いへと。前者は、所詮、小さな宗教教団の仲間内の問題である。後者になると、社会全体をつくっていく力となる。」(143)

「労働者の賃金の問題」(147)

「一般には、その労働者自身の責任ではなく。そもそも職がなければ働けない。何かうまく職にありつけるのは、運の部類である。」「自分個人がすぐれているからだ、など思い上がりせず、感謝して受け取るべきことだろう。」(148)

「こんないい話はめったに聞くことができない。たとえ夢であっても。驚くべき点は、これが後一世紀の一人の大工によって語られている、という事実である。」(150)

「これは、一つには日本のクリスチャンの怠慢である。」「もっと一生懸命まわりの人たちに伝えればいいではないか。」(152)

「この譬え話を語り継いできた伝統のあるおかげで、キリスト教西洋社会は失業保険から健康保険やら、その他さまざまな社会保障制度を発展させてきたのですよ、」(153)

5. 内村鑑三「余の従事しつつある社会改良事業」(明治34年12月30日)

「文明国二千年の経験として聖き美はしき家庭を作るに方て基督教に優るの勢力はない、儒教は政治家を作り、仏教は哲学者を作るかも知れないが、然し温良なる夫と、常識に富む妻と、従順なる子と勤勉なる僕を作るものにして基督教に優るものはない、日本人は基督教なしに他の事は出来るかも知らぬが、家庭の改良のみには基督教に依らなくてはなるまいと思ふ。」